
マジックライフ

DAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックライフ

【Nコード】

N6712B

【作者名】

DAI

【あらすじ】

どこを間違えたのか、オレは二人の少女と一緒に住むことになり、気づいたときには魔法とやらの稽古をさせらることになっていた。親友、幼馴染、そしてまだ見ぬ人達を巻き込んで、オレの生活はどうなっていくのだろう……。

1章「魔法生活、始まりの日」 1話（前書き）

登場人物紹介：<http://darknesswind.yu-nagi.com/novel/magic-life/zinbutu.html>にて。

1章「魔法生活、始まりの日」 1話

確認したい。

オレは高校生で、今は下校途中だ。いいかげん見飽きてしまったブランコと砂場しかない公園を横断中。何も変わったことはない。

ちょうど入ってきたのと反対側の道路が見えるまでは。

突然足がぐんと水平感覚を失ったと思えば、オレの耳では木々をなぎ倒すような地響きの音が木霊していた。一瞬何が起こっていたのか分からなかったが、それが地震だと気付くのに秒単位はいらなかった。それはほんの数秒で収まったものの、地面そのものが空気と入れ替わってしまったような感覚のせいで、尻餅についてしまった。

その直後、赤い何かが、獲物を狙う鷹のごとく、オレの方に迫ってきたかと思えば、我が髪の毛に、熱と焦げ臭い香り残し、思わず目を閉じてしまったために確認はしていないが、後方へ行ってしまった。

それからしばらく目を閉じていたが、そのままにいるのはかえって不安になったため、今始めて目を開ける赤ん坊のように光を探す。しかし、そこにあつたのは白い世界、辺りは白煙に包まれていた。そして今、白煙の中その姿がはつきりと確認できるほどの至近距離に、制服姿の女の子が一人、白い羽が地面に落ちるように、そこに現れた。

呆気にとられたが、すぐに身が凍る。その女の子の両腕は、燃え盛る炎に包まれていた。焦げ臭いなどではすまされない、獰猛な炎。すぐにかき消さなくては、その女の子の命が危ないのではないか。

しかし次の瞬間、尻餅のせいで、ただでさえ近かった地面がより近くに、オレの顔の目の前にあつた。何が起こったかは分からないが、後頭部に激しい痛み。数秒前に何を考えていたか、よく分からない。分かることがあるとすれば、オレは地面に倒れていて、たぶ

ん殴られた。

「あれ、あれ？ ま、間違えた……？」

意識が薄れるというのはこういうものなのか。と、もはやほとんど回らぬ頭で思ったとき、辛うじて機能していた耳は、そんな声を捕らえていた。

ほのかな紅茶の香り。紅茶のことは詳しくないが、ハーブティーであることは分かる。目を開ける前に確認できたその香りは、少し痛む後頭部のことをなんとなく忘れさせ、体を起こす手助けをしてくれた。

そして目を開け、すぐに視界に入ったのは、女の子。制服姿の女の子だった。ティーカップを左手に持ち、オレが目を覚ましたことに気付いたのか、バースデープレゼントをわくわくしながら開ける子供のような目でこちらを見ている。

少しづつだが、眠っていた脳や体が起き始めると、その女の子の、パツチリと大きい目に釘付けになった。そして、その女の子の、哀願動物も逃げ出してしまうような顔立ちに、また目を奪われる。

「あ……起きた？ よかったあ」

髪は少し長めでツインテール。それを結う赤いリボンが印象的だ。着ている制服は、オレが一昨年まで通っていた中学のものだろうか。胸元のリボン辺りの主張は少ないが、そこは今後に期待ということ。

「えっと……大丈夫？」

困ったような表情を浮かべる女の子。すぐにその理由に気づき、目を背ける。メガネをはずした近眼の人並みに凝視していたかもしれない。頭が少し寝ているせいにして、ごまかすように辺りを見渡す。

しかし、収穫はあまり多くない。分かることといえば、オレがいるのはどこかの部屋で、さきほどまでは、今オレが座る黄色のソフ

アに寝かされていたんだろうということ。前にあるテーブルに置かれた、女の子が持っているものと同じティーカップに入れられたハーブティは、オレのための物だろうということ。そしてオレは、現在女の子と二人きりだということくらいだ。

「うんとね、えつとね……倉地拓斗くん……？　でいいのかな。カバンの中勝手に見ちゃった、ゴメンね。それで、どこか痛いところとかない??」

二人きり、と考えると、一瞬で目が覚めた気がしたが、頭に血が上り始めて、結局頭は回らない。問われているのは分かるが、状況の整理が全くできない。自分の名前を呼ばれたのが、余計にいけなかった。声も高めでかわいくて、それでオレの名前を言うのだから、たまらない。

「うつうつ……何か言つてよお……。あつ、も、もしかして、リンが頭ゴンツてやつちゃったせいで声がなくなつたとか?!　ど、どうしよお……!」

急に女の子は立ち上がる。そして気づいたときにはオレの隣にいた。顔が近い。

「あ、あのお」

「そ、そうだ、こういう時はお風呂だよっ!　拓斗くんちよつと汚れてるっぽいし、シャワーだけでも浴びれば、なんとなくよくなるかも?　マイナスイオン効果?!」

女の子は何やら混乱しだしたのか、よく分からないことを言い始めたので、とにかくしゃべれるアピールだけはしようとするオレ。

しかし、それは呆気なくさえぎられ、その細身の腕からは考えられない力で、オレはひっぱられる。逆に女の子の落ち着きがなくなつたせいか、オレはかえって冷静になつてきたものの、女の子にひっぱられなす術なく、でかい犬を幼稚園児が散歩させているかのよう風呂場までつれてこられていた。我ながら情けない。

「じゃあごゆつくり」

そして、オレの脱衣場に押し込むと、もといった場所に戻っていく。

オレがしばらくその場に立ち尽くしていると、食器の音がしだしたので、片付けでもしているのだろうか。

「……」

ポツンと一人になると、いよいよ冷静になり、このおかしい状況を感じつつあった。

「こういう時はお風呂……って、ねえ？」

無駄に独り言がもれる。そうでもしないと、せっかく冷静になったのに、大声で叫びそうだ。冷静になったせいで混乱するのもおかしい話だが。

それでも、体が汚れているのはたしかで、よく見ればタオルなども用意してある。せっかくの女の子の好意を、無駄にするわけにはいかない。それに実際、シャワーでも浴びれば頭はすっきりしそうだ。

結局のところ、整理のつかない頭では、この状況に流されるのが精一杯だった。

「んんー……」

熱いシャワーの湯は、全てを洗い流してくれる。

頭のもやもやもだんだんと消え、ようやくここに至るまでの状況を思い出し始めた。マイナスイオン万歳。

思い出す途中、思わず髪を手で触りつつ、風呂場にある鏡を覗き込んだが、異常はなさそうだ。

それにしても、あの赤い何かはなんだったのだろうか。地震は別に不思議ではないが、赤い何か。超常現象ということばで片付けるには、オレの頭、主に髪の毛が収まらない。

だが、考えても分からないので、さらに先を思い出す。

そこで、気づいた。

「あ、ああ！」

オレは考えもなしに、風呂場の外へ飛び出す。シャワーは止めた

かどうか分からないが、スタートダッシュだけならオリンピックに出られるだろう。

「君って、あのとき腕が燃えてた女の子……あれ？」

ボタンとおおげさな音を出してドアを開けたが、リビングに女の子はいなかった。

かわりに、長い髪の女性が一人。見知らぬ人だ。ソファに腰を下ろしている。きっとこの家の人のだろう。

「……」

後悔先に立たずというのは、こういうことを言うのだろう。

「あの……あは、は……」

自然と変な苦笑いが漏れてしまう。

その女の人は、まるで裸の男が唐突に飛び出したような表情をしている。いや、まさにそういう状況なわけで。

状況を整理する。むこうから見れば、当然オレは見知らぬ人だ。そんな男が風呂場から、しかもタオル一枚辛うじて巻いた状態で、何か叫びながら現れたらどう思うだろうか。

変質者、決定。

しばらくは針が落ちる音さえも聞こえそうな状況だったが、オレはどうすることもできず、ただただその女の人を見つめることしかできない。

始めはむこうも驚いているようだったが、見る見る女の人の顔は赤くなり、肩はワナワナと震えだす。そして、オレを視界から隠すように、女の人は手をこちらにかざした。

「え？」

次の瞬間、耳元で全力でシンバルを叩かれたような感覚。同時に、額には、鈍器で殴られたような激痛。さらに、気づいたときには、オレの視線は天井を向いた、早い話が倒れていた。裸の全身に感じる床の冷たさ。

意識が遠のく。

足音がこちらに近づいてきたが、その主を確かめることは、でき

な
か
っ
た。

2章「師匠と幼馴染が会った日」 1話（前書き）

登場人物紹介：<http://darknesswind.yunagi.com/novel/magic-life/zinbutu.html>にて。

2章「師匠と幼馴染が出会った日」 1話

暖かい。

ふと気づくと、そんな単語が頭に浮かぶ。

なんというか、全身が柔らかくて暖かいものに包まれていて、すごく幸せな気分だ。人肌のようなぬくもり。

「ん……」

耳元で、人の声というか、吐息のようなものを感じる。なんだろうか。

それはそうと、今オレは何をしているのだったか。この幸せな気分を壊したくないが、少し考える。

そういえば、変な夢を見ていたような。地震が起こって、気絶させられて、風呂に入れられて。あのツイーンテールをした女の子はかわいかった。あんな女の子、実際にいるはずがない。いたとしても、オレにはせいぜい夢のような存在。ありえない。

そこまで考えて、目を開ける。

「……」

すぐ閉じた。

ああ、頭が痛い。起きたはずなのに夢の続きを見ているとは、この頭痛のせいに違いない。

「拓斗くん……」

気のせい。この頭痛のせいだ。

頭痛といえば、夢ではオレはそれを二回ほど経験していた。

痛む箇所は、額辺りと後頭部。同じだ。きつと寝ている間にベッドの淵にでもぶつけたのだろう。オレは寝相が悪い、はず。

「リン、入るぞ」

ドアを、ノックして開くような音と、そんな声が聞こえたが、この際は無視。それも夢の一部だ。

やたらとリアルな夢だった。夢で痛みは感じないというが、あれ

はきつと嘘だろう。すごく痛かった。

「な……！ 貴様リンに何をした！！」

宙を舞う、というか、落ちる感覚。そしてすぐに全身に痛みが走る。

突然何が起こったか分からないが、これにはたまらず目を開ける。見えたのは、また天井だった。しかし、すぐにそれを塞ぐように覗き込む人がいた。

「……え？」

夢の中の女の子、だった。

「大丈夫拓斗くん？！ ちよつとレイちゃん、いきなりヒドイよお
お」

「なんでリンとこの男が一緒に、ね、寝てるんだ！ しかも男のほうは……は、はだ……」

夢の続き、ではなかった。裸の全身には、やはり床は冷たい。裸。

「うわっあああ？！」

目が覚めた。それはもう、王子様の口付けなんて比にならないくらい衝撃で。

全て思い出した。あれは夢なんかじゃない。地震も、風呂も、頭の痛みも。そして、さっき目を開けたとき目の前にいた、ツインテールの女の子も。なんで同じ布団にいるんだとか、なんで寝てるときも髪を結ってるんだとか、いろいろ考えたが、何せ今オレは裸。昨日風呂から出て、気絶して、そのまま寝ていたのだ。頭の中は、絡まった紐を解こうとしたら、余計絡まってとれなくなった、的な悪循環でごちゃごちゃになっていく。

そして立ち上がると目の前には、二人の女の人。間違はなく、オレが夢の中の存在だったと思ったかった二人。

「お、おはようございます……」

口から出たのは、ただそれだけ。

本当に、情けない。

「……悪かった」

「いや、こちらこそ……」

謝られた。髪の長い女の人に。

勝手な第一印象で、クールアンドビューティー、でも冷たくて無口な人。と思っていたので、失礼な話だが、意外だった。

謝られたのは、昨日の風呂から飛び出してきたオレを吹き飛ばしたことと、今朝ベッドから吹き飛ばしたこと。何か釈然としないものがあつたが、オレも後ろめたさがあつたので、そこは飲み込む。

ちなみに、ここはリビングで、オレは現在高校の制服を着用中。さすがにあの格好のままでは、何かと危ない。変質者のという意味もあるが、自分の命の危険を感じる。

「はい、お待たせ」

お互い軽く頭を下げた後、なんとなく何を話せばいいか分からなくて困ったとき、あいかわらず赤いリボンでツインテールの女の子が、お盆に、ご飯や味噌汁、卵焼きといった、純和風な料理を持ってやってきた。三人分ある。

昨日もしたが、またぐると部屋を見渡す。昨日よりは多少落ち着いているせいか、うちのものより二周りは大きいであろうテレビや、アンティークっぽい時計、ピアノが見て取れる。料理とのギャップを感じつつも、それなりに家具にお金が使われていることが分かる。

そうこうしているうちに、その女の子が手際よく、ソファに座るオレと、その向かい側のソファの長い髪の女の人に料理を配ると、オレの隣に座り、最後に自分のものを並べた。食器も高そうだ。

「では、いただきます！」

「いただきます」

女の子に習って手を合わせ、何はともあれ箸を進める。朝はパン派だが、そこはどうでもいい。なにせ女の子が作った手料理、しっ

かり堪能しなくては。

「おいし……」

正直な感想だった。ただの卵焼きなのに、思わず声が漏れた。うちの母さんは大雑把で料理があまり上手くないから、というのもあるかもしれないが。

「ほんと？ほんとに美味しい？拓斗くん？！レイちゃんそういうこと言ってくれないから、すごく嬉しいよ」

満面の笑み。そのままテレビに出れば、一躍時の人になりそうだ。こんな笑顔を見られるならば、ずっとこうしていたい。

などと、今朝に引き続き幸せモードに入るオレだが、なんとなくおかしいと思い始める。いや、もっと早く気づくべきだったが。

「あの……いろいろ聞きたいことがるんですけど……」

何が聞きたいのか、自分でもよく分からない。昨日からいろいろあつて、やはり頭の整理が追いつかない。だが少しづつでも、独走している事柄を追い抜かなければ。

「えっと……」

ツインテールの女の子、と言いかけて、すぐに飲む。そういえば、名前も知らないということに気づく。女の子は、オレのカバン探したと言っていたから、オレの名前を知っているのだろうが、自己紹介というものすらしていなかった。

「あ、えっとね、リンは海南リンだよ。リン、って呼び捨てでいいからね！」

そんなオレを察してくれたのか、ツインテールの、もとい、リンは、そう言うときまたニツコリと笑った。女の子を呼び捨てにするのは、正直慣れていないが、本人の希望ならば仕方ない。まあ慣れていないというか、他に女の子で呼び捨てにするのは一人しかいないのだが。

「風美レイ。名前で呼べ」

次いで、向かい側の長い髪の女の子の人、レイさんが手短に名乗る。こちらは呼び捨て希望なしだ。

「オレは倉地……」

「知っている」

最後に、二人に習ってオレも名乗ろうとしたが、レイさんに一刀両断された。第一印象、間違っていないかもしれない。

だが、それは置いておく。他にも聞きたいことが山ほどある。事柄に周回遅れにされそうなほどに。

「それで、リン……」

「あ、拓斗くん」

一刀両断、二度目。今度はリンにされた。

「リン達に聞きたいことあるだろうし、リン達も話すことがあるんだけど、あんまり時間がないから、帰ってからにしようか。学校いかなきゃね」

なんというか、一刀両断されてこっちは死んでいるのに、さらに屍を燃やされたような気分。ということは、またオレはこの家にこないといけないということか。そして学校。完全に忘れていた。そういうば、リンはいつのまにか学校の制服着ていた。

さっきは数分若かったオレの若気の至りで、ずっとこうしていたいなどと思ったが、ここにいてはいけないと、オレの本能が継げ始めているような。しかもご丁寧に、その危険を表す方向まで告げられている気がする。敢えて言うなら、右斜め前から。いわゆる、レイさん。つまりは、レイさん。

「ほら拓斗くん、行くよ？ 拓斗くんも学校あるよね。じゃ、レイちゃん行つてきま〜す！」

「え、ちよつと待つ……」

オレは流されやすい。自覚はあったが、ここまでとは。川の上流から放った笹舟か。流されやすいというか、流れるのは必然。

ということで、昨夜同様、異常な強さでひっぱられ、オレはなす術なく、玄関へと向かうことになってしまった。それも、またここに戻るという死の宣告に等しいおまけつきで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6712b/>

マジックライフ

2010年10月10日05時50分発行